

氏 名	熊 澤 栄 二
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	工 博 第 1773 号
学位授与の日付	平 成 10 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	工 学 研 究 科 建 築 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	祭祀にみる上賀茂の景観構造

(主査)

論文調査委員 教授 高橋康夫 教授 小林正美 教授 中村良夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、京都北郊に位置する上賀茂周辺域を対象として、上賀茂の産土神社である賀茂別雷神社^{かもわけいかづち}（通称 上賀茂神社）における祭祀とのかかわりから、その地域に潜在する場所の意味について文献史料に基づき考察し、上賀茂の景観構造を解明したものである。

論文は全6章からなる。第1章を序論、第2章から第5章までを本論とし、第6章を結論とする。本論の構成は、第2章から第4章までが個別の事例研究、第5章が総合的な考察となっている。

第1章では、研究の意義・目的を述べ、近年の既往研究の検討を通して本研究の位置づけを行い、本論文の全体の構成を述べている。特に、本論における重要概念である「景観」「場所」について、既往研究をもとに問題領域を確定している。また景観論の方法として祭祀を通して考察することの有効性を論証している。

第2章では、上賀茂における北域の意味を問題にしている。まず賀茂六郷の原型が整う平安時代中期までの期間について、太政官符などの文書の再検討を通して、上賀茂神社の行政上の領地境界と聖地境界との「差異」を指摘している。この差異が生じた原因として、上賀茂神社の北に位置する神体山^{こうやま}「神山」の範囲が、領地を超えて北にむかって大きく広がっていたことを指摘している。さらに地誌・名所案内記などの史料の分析を通して、上賀茂全域に張り巡らされた意味の連関構造を明らかにし、上賀茂の諸場所が北に向かって意味づけられていることを明らかにしている。

第3章では、賀茂祭の全日程が「賀茂神話」の再現であることを再検討したうえで、祭日の間、上賀茂の地域全体が神話再現のための舞台となっていることを明らかにしている。さらに、賀茂祭に奉仕する神官の所作から、神籬である^{みあれしよ}「御生所^{おかこい}御園」と「本殿」が聖地「神山」へと空間的に開かれている様子を明らかにしている。またあわせて、上賀茂神社において重要な儀礼である「賀茂祭」の歴史的な展開を検討している。

第4章では、賀茂祭において最も重要な神降ろしの儀礼である^{みあれ}「御阿禮神事」に臨む祭員の所作を検討することを通して、祭の場の意味が変化していく過程を明らかにしている。特に17世紀の祝詞の検討から、神事に臨む神官達が「祭る人から祭られる神へ転生」し、さらに「祭られる神から祭る神へ再生」する祭祀の様子を論証することを通して、祭の場の意味が深化していく過程を具体的に明らかにしている。

第5章では、御阿禮神事において奏される神歌を検討することで、神事の場において「神代の浦」という神話的景観が現象することを明らかにしている。さらにこの神歌を第2章から第4章までで得られた知見をもとに解釈することを通して、神話的な世界が重層して現れてくる、上賀茂の景観の特性を明らかにしている。特に、祭祀という状況で成立する景観の視覚構造として、「視線の二重構造」と「視線の二乗構造」を指摘し、これが上賀茂の地における最も根本的な景観の構造であることを論じている。

第6章の結章では各章での論点と小結を整理し、研究の成果を応用した将来の景観研究の方向性を考察している。

論文審査の結果の要旨

京都市は、歴史と自然ゆたかな景観の形成を目標としてきたが、近年景観に関する大幅な政策転換・制度改定にともない、地域ごとの特色を生かしていく新しい景観形成の構想が策定されるようになった。本論文は歴史的風土特別保存地区にもあたる上賀茂神社の境内地周辺域を対象として、その地域に潜在する「場所の意味」を文献資料に基づき考察し、「景観の構造」を解明したものであり、得られた主な成果は以下のとおりである。

1. 上賀茂地域の諸場所について書かれた史料を、比較・検討することで、上賀茂全域に張り巡らされた意味の連関構造を明らかにし、聖地である北山に向かって上賀茂の全ての場所が秩序づけられていることを指摘している。
2. 鎌倉後期以降の神事記録を比較して、上賀茂神社の最も重要な儀礼である「賀茂祭」の全日程が、この地に伝わる賀茂神話の再現であることを新たな史料によって考証し、祭の期間には上賀茂の地そのものが、神話再現のための舞台として機能していたことを明らかにしている。
3. 賀茂祭のなかで最も重要な神降ろしの儀式「御阿禰神事」における祝詞を検討することによって、神事に臨む祭員の意識変化に即して、現実世界から神話的世界へと、祭場の意味が移行していく関係を、明らかにしている。
4. 御阿禰神事において奏される神歌の解釈から、「神代の浦」という景観が、祭を行う者達に共有されていることを指摘し、それが上賀茂固有の景観であること、神話的世界の顕現である「神代の浦」と現実の世界とが重層して現れてくる構造が、上賀茂固有の景観構造であることを論証している。

以上を要するに、本論文は上賀茂の地域固有の「景観の構造」と「場所の意味」を、上賀茂神社の祭祀を検討するというユニークな視点から解明し、数多くの知見を提示したものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって本論文は、博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成10年10月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。